日本科学者会議

福岡支部ニュース

2009 年 10 月 21 日発行　No. 199

● 日本科学者会議事務局

〒 113-0034　東京都文京区湯島 1-9-15
Tel (03) 3812-1472

● 福 岡 支 部 事 務 局

事務局長　三好 永作
〒 816-8580 福岡県春日市春日公園 6 丁目 1 番地
九州大学大学院総合理工学研究院融合創造理工学部門
Tel: 092-583-8839　Fax: 092-583-7677
E-mail: miyoshi@asem.kyushu-u.ac.jp
郵便振替　福岡　01790 – 1 – 5576

目次

1．JSA 読書会 2009 年度合宿の報告
2．2009 年「夏の学校」参加記
3．事務局からのお知らせ

1．JSA 読書会 2009 年度合宿の報告

読書会のメンバーは 7 月 15、16 日、志賀島にて合宿の学習会を行った。

参加者は 10 名であった。15 日 (水) はテーマを教育・大学問題として、杉浦、鎌田、村上、藤井、酒井の 5 氏の発表があった。

I. 杉浦實氏は「教育のあるべき姿を考える―大田堯の教育論を基にして」と題して、大田堯「教育とは何か」岩波新書 (1990 年) を紹介した。

1. 先ず、子どもの教育を受ける権利が子どもの権利に関する条約 (28 条)、日本国憲法 (26 条)、旧教育基本法 (3 条、6 条) で保障されているとした。

2. また、人類の発達史の中で道具を用いてものをつくる、学習、遊びの重要性にふれた。

以下、項目のみ述べれば、
3. 目的意識をもたせる、
4. 遊びと教育、
5. 子どもの能力、―ひとの能力は千差万別、親や教師は子どもの能力を見抜き、伸ばすことを時間をかけて努力すべきである、
6. 文化としての教育―言葉は異なるコミュニケーションの道具のみならず、思考の重要な道具である、
7. 人権としての教育、
8. 大田氏 (日本教育学会会長) は岡本道雄臨教審会長あての要望書を提出した (1985)。

—教育は、教育学の知見でなく、人間の発達に関わる科学的知見、芸術家の人間とその発達についての知見を充分に吸収されることを希望します。

II. 鎌田理と村上陽三の両氏は「大学破壊—国立大学に未来はあるか」全大教編、旬報社 (2009) を紹介した。その内容は、

第 1 章 : 法人化後に一番困難にさらされるようになった地方国立大学の現状と問題点

第 2 章 : 「高学歴ワーキングプア」の惨状を見れば、大学教員を目指す若者が消滅する日は近い

第 3 章 : 大学の教育・研究の財政的基盤が揺るがされ、競争的経費への急速な傾斜が生み出している問題点を検出

中略

国立大学の危機をもたらしている最大の要因はもともと低かった政府の高等教育への財政支出が、法人化後に運営費交付金毎年 1% カットするなどますます貧困化していることにある。文科省のねらいは道州制とも関連して、地方大学をつぶし、統合化し、さらに財政支出を減らすことにある。この問題は「日本の科学者」10 月号 (大学問題特集号) にも詳しく載っている。

III. 藤井哲は「大学教育」と題して発表を行った。

1. はじめに

「教育開学は大学からの」考えに立って、普段、世間から批判されない、大学内部の現状 (法人化前のものではあるが) の批判とともに、将来の理想像を描いてみたい。

日本人の教育観・科学的精神—日本の教育の基本は、伝統的に記憶の強制でなかったか、科学者となるためには、科学の精神をわがものとしなければならない。

2. 教育

教育の目標は、真、善 (社会人としてのモラル)、美 (芸術による心の安らぎ) の能力をのばすこと。これは個人のためだけでなく、社会的に必要なものである。

勉強とは楽しい筈のものである。(過去の学校教育の悪いイメージが身についているのか)。教室における、教師と学生との相互作用がないことが目下の教育の重大欠陥である。教育には費用がかかる (それを儲の手段にしてはならない)。

(専門課程・大学院教育における教師の心得)

研究の introduction では、主要文献を与え、勉強させて、質問をうける。それに直接

答えるのでなく、調べ方を教える。

(博士学位論文)

　公聴会は新聞等で公に予告すべきである。博士論文が市販される等、完全に公開すべきだ。現行の非公開に近いのは学位に値しないものを隠すためか？

(入学試験)

　記憶力、反応の速さのみの試験であってよいはずがない。入試の意味と試験問題の再検討が必要である (浜林正史「これでいいのか大学入試」大月書店 ,1998)。

高校と大学の間に 1 年間の余裕期間を置く (デンマーク)。

　企業と大学を 1 年おきに通うサンドウィッチ学生は優秀である (イギリス)。

3. 研究・研究費

　国際交流も有効であるが、まず国内の大学あるいは研究機関との自主的、自律的な移動を推奨する。

　秘書について ; 大学にいて文科省の仕事をする事務官を 1 桁減らす。その代わりに学科・研究室の秘書を増やす。

　研究を論文の数で評価すると、成果をこまぎれにして発表することになり、論文の質を下げる。学会等で論争するときには、一定のモラルを守る。権威を守る自己主張ではなく、互いに真実を追求するように心掛けること (影の声 : 権威論者に反論、疑問を呈す勇気も必要だ)。

(研究費)

　研究費格差が大きい。文科省が「研究費」配分で大学を支配する体制を改めること。

　研究費を有効に使うために、単年度会計を改め、せめて 5 会計年度へ。

・大学内で不要になった計器類を誰でも使えるように、保守管理部門をつくる。
・他の大学に移るときに設備・備品をもっと分けるように―会計制度の改革

4. 大学の運営・政策

・悪の根源である文科省は廃止すべきである。高等教育・予算は GDP の定比率に固定する (しかし、0.5% ではあまりに低すぎないか。OECD の平均は 1.1%)。

[文科省官僚]

・文科省の行政官、大学の事務官の大多数は学問について無知であり、一般の法律の適用にのみ有能である。文科省官僚も少くとも修士、高級官僚と大臣には博士の学生が必要ではないか。素人が大学制度をいじるから変なことになる。
・ヨーロッパの大学なみに授業料をゼロにする。
・大学の自治について：教授会の自治、学長選挙について―省略

5. 教師のモラルと評価

・教育者の責任：成績証明に単位を与えた教員名を明記し講義の責任を明確にすること。
・在学中に就職活動を容認するのは大学における勉学の軽視である。
・大学教師になるのにいかなる資質が必要か。・なぜ研究業績が必要か。
・暗記力だけで評価された「頭がよいい人」―官僚、大部分の大学教授は、ごまかしの作文を作る能力に長けているが、真実を見つける能力がない。

6. 研究機関

・研究の場は大学とその他の研究機関であるが、評価は学会でなされる。理科系の全国の学会を一つの建物にまとめた「科学アカデミー会館」を国費でつくる。一つの学会に所属していれば、他の学会の講演会等に参加できるようにすれば、異なる分野の学問の交流に役立ち、画期的な研究の源になる。

7. 高校生が私立大学を選ぶときの注意―省略

IV. 「キューバの教育」―酒井嘉子

幼稚園から大学教育まで教育費は無料。識字率 99.8%。小学校 20 人学級、中学 15 人学級、ほとんどの若者が高校を卒業し、18 ～ 24 才の青年の 50% が高等教育を受けている。

中南米統一国際試験で 2 位を大きく引き離し、高得点を上げ、ユネスコがフィンランドとともに教育のモデル国として推薦しており、世界の教育専門家からも注目されている。

・フィンランドの教育との共通項

生徒達が刺激しあう相互学習をとり入れている。また共に教育と福祉政策が一体となっており、教育費も給食費も無料である。

・教育の理念―ホセ・マルティ「人間は教養を身につけてこそ自由になれる」

・なぜ高学力なのか。

※格差のない教育―都市と農村の教育格差がない。61 年に起った「全国識字運動」―大衆自身が教師となって文字を教えた。中学生も農村に行き、農民に 文字を教えた。

※小・中学校にもある進級テスト―落ちこぼれをつくらないという方針である。1986 年前期試験ではハバナ市内の中学生の 75% が試験に落ち、39% が追試にも落第した。

※少人数学級の実現と教員養成― Sub-teacher 制がとり入れられ、大学生が教育実習でベテラン教師と個人で教えている。1 年間は大学で勉強し、2 ～ 5 年は実際に生徒達を受け持ちながら、放課後と土曜日に大学で専門科目を学ぶ。

※教育は地域でわかちあうコミュニティの共同責任―様々な形で地域住民が教育に加わる。

※子どもたちの興味関心を伸ばす教育―「趣味サークル」という科目があり、農業、文学、芸術まで 206 の分野をカバーする。

・大学教育

　キューバ全国に 63 の大学があり、2 万人を超える教授を擁す。「全人民が大学水準の教育をめざして進む」ことを決め、資料を出版し、テレビ番組をデザインした。

・ワーキングプアを生まないキューバ流リストラ

　ソ連崩壊後、2002 ～ 2003 年に、砂糖工場の半分は閉鎖、サトウキビ畑を 3 分の 1 に、砂糖産業従事者の 25%、42 万人がリストラされた。

　政府は生活を保障すると確約した。「仕事としての学習」プログラム、学ぶことに給与を払うことで労働者は失業せずにすんだ。このプログラムは、教育省、砂糖省、高等教育省、社会労働省が連携して実施した。

参考文献 : 吉田太郎「世界がキューバの高学力に注目するわけ」築地書館 (2008)

　1 日目の夜はグラスを片手に懇談し、「世界で最も豊かな国 (GDP は低いが幸福満足度で) の 1 つ、ブーアン紀行」なども披露された。

以下、次号
(岸本　誠)

２．2009 年「夏の学校」参加記

　9 月 4 ～ 8 日に行われた、「日本科学者会議 (JSA) 主催の院生・若手夏の学校 in 草津」に参加した。ハンセン病と科学者の意義、大学院生の社会的地位、さらに現代医療思想の構造的諸問題などのフィールドワークや討論を 3 日かけて行った。その中でハンセン病元患者の谺雄二（こだま　ゆうじ）さんがハンセン病に発病してから、ハンセン病国賠訴訟

の原告団に至るまでの話を聞いた。人権とは、自分の存在意義とは、そう自問自答しながら生きてきた研さんの話を聴き、私は衝撃をうけた。

研雄二氏は 6 歳の時にハンセン病を発症し、7 歳の時に草津の収容所に入った。国家的政策の下で人として生きることを許されなかったハンセン病患者の方々。彼らの人権蹂躙の実態、そして非人間的な差別と抑圧に抗して闘ってきた運動の歴史を話していただいた。「私は一度しか母親に抱かれたことがない。一度、ハンセン病という奇病になった時、親に一度、捨てられた。しかし、母もハンセン病になった時、初めて母を強く抱きしめることができたし、抱きしめてくれた。」

私はこの言葉を聞いた時、なんとも言えない想いを感じた。

研さんは「今後の目標、夢と、現状で一番つらいことは何ですか？」という質問に対し「いままで重監房（跡地）やハンセン病療養施設として 60 年間住んできた。正直、政策として私達は非人道的なことをされ続けた。が、私達がずっと住んできた土地を新しく、自分たちの町として、自分たちで作り上げていきたい。そして、昨日、ちょうど仲間が一人亡くなった。いま私が一番つらいのは、過去の出来事ではなく、将来の目標を一緒に掲げてきた、同志が亡くなることである。私は常に仲間たちにまだ死んでくれるな。がんばろう。と言い続けているのだ。」と語って下さった。

私は誤解していた。原告団というのだから悲観的な思いを一面に出してくるものだと考えていた。しかし、話の内容は悲観的な部分もあったが、話し方は歴史的事実を述べる話し方であった。そして、将来への熱い思いは、私に衝撃を残した。

私は、この衝撃を忘れず、私自身の将来に向けて頑張ろうと思う。

(鈴木大空)

3. 事務局からの報告とお知らせ

エネルギー研究会 (第 33 回): 10/24(土)14 〜 17 時、びおとーぷ

「エネルギー危機からの脱出」(枝廣淳子、ソフトバンククリエイティブ)、ほか

「日本の科学者」読書会 : 11/9(月)14 〜 17 時、びおとーぷ

2009 年 11 月号

エネルギー研究会 (第 34 回): 11/28(土)14 〜 17 時、びおとーぷ

内容未定

「日本の科学者」読書会 : 12/7(月)14 〜 17 時、びおとーぷ

2009 年 12 月

下記は終了しました.

例会@九大 : 10/16(金)17 時〜 , 伊都ＷＺ総合学習プラザ第 10 講義室

高原淳氏 (九大工)

「ソフトマテリアルの表面・界面の特徴を生かした材料設計と機能特性」

液晶、ゲル、界面活性剤、合成高分子、生体高分子、エラスト マーなどの軟らかい材料「ソフトマテリアル」で形成される表面 と界面は身の回りの至る所に存在し、主として有機高分子で形成 され、有限の厚みと、特徴的な動的特性、さらにそれ自身が能動 的な機能を有しています。本講演ではソフトマテリアルの表面・ 界面の特徴を生かした材料設計について講演者らの最近の研究を紹介します。